

感染症定期報告感染症別文献一覧表(再生医療等製品 2022/4/1 ~ 2022/9/30)

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	アルボウイルス感染	ProMED-mail 20211006.8698881	新規ウイルスYezo virus (YEZV) が日本で発見された(2019年に記録された41歳の男性及び2020年に報告された1例)。journal Nature Communicationsで発表された研究において、この2例の血液サンプルの遺伝子分析を通じて本新規orthonairovirusを特定した。またダニ媒介性疾患の疑いのある248例の血液サンプルの検査が行われ、2014~2020年に7症例が存在したことが判明した。北海道のニホンジカ及びアライグマにおいてYEZVに対する抗体が発見されたことなどについて記載。(2021年10月6日付け)
2	コロナウイルス感染	Nature. 600(2021)133-137	コロナウイルスは、2003年以降、進行中のSARS-CoV-2パンデミックを含む3つの主要な流行を引き起こしている。いずれの場合も、我々の種におけるコロナウイルスの出現は動物保有宿主からの人畜共通伝播と関連しており、このような病原体がどのように流出しやすく、新しい種に適応するかを強調している。コロナウイルス科の認識されている4つの属の中で、これまで報告されているヒトの感染症は、 α コロナウイルスと β コロナウイルスに限られている。本稿では、急性未分化熱性疾患のハイチの小児3例の血漿サンプル中の豚デルタコロナウイルス株を同定する。ゲノム解析および進化解析から、ヒト感染は、Nsp15およびスパイク糖蛋白質をコードする遺伝子において、同じ突然変異シグネチャーを獲得した異なるウイルス系統の少なくとも2つの独立した人畜共通感染症の結果であることが明らかになった。特に、構造解析から、受容体結合ドメインを含むスパイクS1サブユニットの変化の1つが、タンパク質の柔軟性や宿主細胞受容体への結合に影響を及ぼす可能性が予測される。我々の所見は、以前に認識されていたヒト関連コロナウイルス群以外のコロナウイルスによるヒト感染につながる進化的変化と適応の可能性を強調しており、特にヒトと動物の密接な接触があると思われる状況で顕著である。
3	トリコフィトン感染症	Microbiol Spectr. 9:2(2021)e00284-21	皮膚糸状菌症及び体部白癬のヒト症例から分離された <i>Trichophyton</i> について、最近改訂された分類法を照合し、遡及的に特定したところ、 <i>Trichophyton persicum</i> sp. nov.及び <i>Trichophyton spiralfforme</i> sp. nov.が新たに同定された。
4	肝炎	CDCホームページ. https://www.cdc.gov/media/releases/2022/s0421-hepatitis-alert.html	米CDCは、現在Alabama Department of Public Healthと共同で、1歳から6歳の小児において生じた病因不明の肝炎9例のクラスターについて調査している。これら小児のいずれにおいても、現在のSARS-CoV-2感染による入院例はない。米国における初めての症例は2021年10月にAlabamaの小児病院で特定され、原因不明の重大な肝損傷(一部は急性肝不全)を呈した5例の小児が入院した。これらの症例においてアデノウイルス検査は陽性であった。A型肝炎ウイルス、B型肝炎ウイルスおよびC型肝炎ウイルスは除外された。調査中、病院の記録のレビューにより、4例の追加症例が特定された。これらの症例では、全例において肝損傷およびアデノウイルスへの感染があり、臨床検査により、一部の小児においてアデノウイルス41型の保有が特定された。これら小児の間における疫学的な関連性または共通の曝露に関しては不明である。CDCはまた、最近欧州で報告された、原因不明の肝炎の小児症例が増加していることを認識していることなどについて記載。
5	肝炎	ProMED-mail 20220420.8702720	Health Ministryの2022年4月19日の発表によると、5歳未満のイスラエルの小児12例は急性肝炎と診断された。急性肝炎とA型、B型、C型、D型、E型肝炎とは関連はない。Schneiderの報道官は、全7例の小児がCOVID-19から回復したが、急性肝炎との関連の証拠はなかったと述べたことなどについて記載。
6	肝炎	WHOホームページ. https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2022-DON368	病因不明の急性肝炎-英国および北アイルランド: 2022年4月5日、世界保健機関(WHO)は、central Scotlandで10歳未満の小児における病因不明の重度の急性肝炎10例について通知を受けた。4月8日までに、英国で74例の症例が確認された。肝炎ウイルス(該当する場合はA、B、C、E、およびD)は、これらの症例の病因を理解するためにさらなる調査が進行中である間、臨床検査後に除外された。これらの10例のうち、9例は2022年3月に発症し、1例は2022年1月に発症した。重症急性呼吸器症候群コロナウイルス2型(SARS-CoV-2)が数例で検出されていることなどについて記載。
7	肝炎	厚生労働省ホームページ. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_25509.html	WHOの報告によると、2022年4月21日現在、12ヶ国で少なくとも169例(死亡1例)の小児における原因不明の急性肝炎が継続して報告されている。うち、74例でアデノウイルスが検出されているが、原因ウイルス等については不明である。 国内の暫定症例定義に該当する小児の原因不明の急性肝炎の入院症例の発生状況(4月28日12時時点) 累積件数: 3件、肝移植0件、SARS-CoV-2 PCR検査陽性0件、アデノウイルスPCR検査陽性0件

ID	感染症(PT)	出典	概要
8	細菌感染	Sci Rep. 11(2021) 2684	現在までに、 <i>Anaerococcus</i> 属には13種が割り当てられており、この属の種のほとんどは嫌気性であり、人間起源である。 <i>Anaerococcus urinomassiliensis</i> sp. nov.、strain Marseille-P2143T株は、自己免疫性肝炎及び膜性増殖性糸球体腎炎に罹患した17歳の少年の尿から、培養アプローチを使用して分離された <i>Peptoniphilaceae</i> 科のメンバーである。本研究では、この新種を説明するためにtaxono-genomics methodを用いた。Marseille-P2143T株は、血液寒天培地上に半透明のコロニーを持つグラム陽性球菌であった。そのゲノムは2,189,509bpの長さで、33.5 mol%のG + C含有量であり、 <i>Anaerococcus provencensis</i> 株9,402,080と98.48%の16SrRNA類似性を示した。 <i>Anaerococcus urinomassiliensis</i> 株Marseill-P2143Tを近縁種と比較すると、値は <i>A. hydrogenalis</i> 株DSM7454T (NZ_ABXA01000052.1)で71.23%、 <i>A. provencensis</i> 株9402080T (NZ_HG003688.1)で90.64%の範囲であった。
9	細菌感染	第70回日本感染症学会東日本地方会学術集会、第68回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会 (2021/10/27-2021/10/29)075	【症例】慢性心不全、大動脈弁狭窄症の既往のある酪農家の70歳男性が、呼吸困難、左手関節痛を主訴に他院を受診、慢性心不全増悪の診断で当院へ紹介搬送された。来院後の診察で左手関節の腫脹、熱感があり血液検査上CRPの上昇を認めた。手関節の関節穿刺では膿汁が引け、化膿性手関節炎、慢性心不全増悪の診断で入院、血液培養を採取してVCM、CTRXの投与を開始した。翌日に血液培養2セット、関節液から院内で同定不能のグラム陰性桿菌が検出された。感受性試験ではCTRXに感受性があり、VCMを中止しCTRXのみ継続した。入院後に腰痛の訴えがあり、腰椎MRIで第4、5腰椎に椎体椎間板炎、両側腸腰筋腫瘍を疑う所見を認めた。第10病日に腸腰筋腫瘍のドレナージ術を実施しCRPは順調に低下、第28病日に腰椎の後方固定術を実施した。感受性結果から抗菌薬の内服以降を目的にABPCへ変更したが薬疹の出現があり、LVFXへ変更した。起炎菌であるグラム陰性桿菌は質量分析でも同定がつかず、16Sr RNA遺伝子解析で <i>Mannheimia varigena</i> と同定された。【考察】 <i>M. varigena</i> は牛に呼吸器感染を引き起こす <i>M. haemolytica</i> から1999年に16Sr RNA遺伝子解析により分離同定され、仔牛の肺炎、流産、髄膜炎、敗血症などの報告がある。患者は仔牛業に従事する酪農家で仔牛からの感染が示唆され、また <i>M. varigena</i> のヒトへの病原性を持つ可能性が示唆される。本症例は <i>M. varigena</i> のヒトへの感染の世界で初めての報告である。
10	白癬感染	日本医真菌学会雑誌. 62(2021) 63	2020年に東京、埼玉、千葉、静岡、兵庫、山口、熊本において210名の白癬患者から分離した、 <i>Trichophyton interdigitale</i> (82株)及び <i>T. rubrum</i> (128株)の210株からTRF耐性を示した5株を分離した。全て <i>T. rubrum</i> で、TRFに対する最小発育阻止濃度は、32mg/L以上を示したが、アゾール系抗真菌薬には感受性であった。また全株のスクワレンエポキシダーゼ (SQLE) 遺伝子にL393Fの変異が認められた。国内白癬患者の約2.3%は耐性株に感染し、 <i>T. rubrum</i> 感染に限定すると約3.9%の耐性率となる。一方、インドにおいて2018年から、TRF耐性 <i>T. interdigitale</i> による体部白癬が流行しており、国内でも2020年から渡航者に感染が認められている。流行株の遺伝子性状、生理学的性状、病態から新種の <i>T. indotineae</i> として命名された。